

J2.993:2

2 of 3

\* KOGEN, Vol. 8, 1945

67/14

c



短

第八號

高原

追悼号

歌

歌

歌



東津久仁高原第八號目次越光氏追悼特刊別号

現代名家鈔——釋道空氏作品

絶詠……故村越光子

追悼歌

高山 要造 賛田 清子 飯野 孝子 星賀 富久 阪倉 喜代子  
吉田 崎子 磯川 芳尾 後藤 治 柿 九次郎 松井 太四郎  
三保 周策 矢尾 嘉夫 川崎 富子 森本 田鶴子 野田 勇吉  
田名とも 柏木 天浪 神部 孝子 糸井 野菊 永瀬 勇  
泊 良彦 越後 桂子 野村 鷹聲 升谷 千代

追悼文

噫 村越 光子氏…… 賛田 清子  
村越 光子氏を悼む…… 高山 要造  
悼 村越 光子氏…… 森本 田鶴子  
村越 光子氏を憶ふ…… 泊 良彦

高原詠草一

拾四氏 二八

永瀬 勇 田中 葦城 糸井 野菊 加藤 けい子 秋尾 太助  
鹿島 倫子 尾川 清子 兒玉 友子 野村 鷹聲 貴家 し子  
柏木 天浪 室高 さち 三保 周策 和多 由良

感動表現の問題(承前)——紹介文 二四  
名流短歌評釈…… 泊 良彦

高原詠草二

参拾二氏 三三

上田 綾子 原 喜叫 柳本 錦子 升谷 千代 高橋 東民  
鈴木 緑松 大空 魁 田名とも 松浦 清子 井上 荻野  
山田 俊吉 越後 桂子 中川 末子 岩月 静恵 三原 かつの  
春野 陽子 山本 徳之助 阿部 たみ子 星賀 富久 阪倉 喜代子  
後藤 治 大平 澄治 岩田 立枝 矢形 溪山 佐藤 不二子  
安井 静女 梅本 静恵 西村 津矢子 吉田 晴江 横澤 観月  
杉浦 滋 足田 桂子

高原選抄集に就て…… 泊 生 四一  
前号數首に就て…… 糸井 野菊  
數首短評…… 泊 良彦  
高原詠草 三 拾七 異 四七

矢尾 嘉夫 加川 文一 綾織 謙介 山内 曾六 村上 正男  
豊福 昌範 宮村 一雄 吉松 博志 冲宮 求香 吉田 きみ子  
上村 比呂子 岩本 志満子 渡辺 正子 山本 雅子 川崎 とみ子  
仁熊 登美子 泊 良彦

選歌餘筆…… 泊 良彦

△高原七号抄…… 安高 さち 永瀬 勇

○峯土 香短歌會抄(田中葦城) ホストン 歌會抄(永瀬 勇)  
○グラナダ短歌會抄(森本 田鶴子) ハート山歌會抄(加藤 けい子)

編輯後記 附消息…… 泊 良彦 三



現 代 名 家 鈔 (ハ)

釋 迢 空 氏 作 品

最上川ぞひに　いたすらくだり来て、羽黒の空の夕焼  
けも　見つ

山川の激ちを見れば、はろばろに　満ちわかれ行く  
音のかそけさ（三矢先生病篤さが程事ありそ堂ア島にこもれり）  
ありありて　着欲むき帯も買はざりし　かかる悔みも、  
今は言ひけり（下婢の死）

はかなさは　巖の下に人死にて　しらせある日も、客  
みちて居り（巖山朋之の中、文学士坪田某の死）  
山びとは　轆轤ひきつつあやします。わがつく恩の  
大まと思を

葛の花踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行き  
し人あり

あけ近く　消えしづまる月の空、むなしき山に　木  
枯つたふ（奥州青嶺に逗留して）

髻髻顯つ。速吸の門の波の色。歳の夜をすわる　田舎の  
うへに



## 地道を辿る

泊 良 彦

道は遠きにあらざる、近きにある、と古聖は垂訓してある。この道とは世の道德のそれであるが、今これをわが歌の道として味けつても意義深いものがあると思ふ。

私達は目標を遠く高く置かねばならぬ。理想卑近なるが故に些事に拘泥し、つまづき、行詰まり、或は私的小感情に促けられたりする。

而も、千里の道と雖も一歩より始まることを忘れてはならない。先づ一歩をしつかと踏みしめ、踏み出すことである。常に心を盡して修め究むることである。あらゆる方を見ず、眼を地道ぶみちに視據しとあることである。眼を内に向けて深く省察することである。

常に修め究め、省察しつゝ一歩一歩地道を辿る者に行詰りや蹉跎さだけるいであらう。若しありとしても直ぐに起り更に強く踏み出せるに違ひない。道の遠きは、近きに在るを見ないがためである。何よりも――

私達は精神に確固不動のものを把持して、この寂々さびとした地道を踏みしめ踏みしめ辿ることである。結局道の遠近の如何は心に在る。



故村越光子氏

追悼歌

絶詠  
わがむくろユタの荒原に埋めてむ八千の同胞に  
故村越光子

追憶

高山要造

額のべにあぶら汗しじににじみ出つ病友の苦しみの極まりて見ゆ  
日増しの痛みに弱る吾が友を慰まめかぬてともに泣きしか  
病勢に押されて日々に行きゆく友をし看つつ術もすべなし  
こやあれや聲はるぼそと語りつぐ病友は癒えぬを覺りしか終ひに  
瞳すゑて何をし見むとする友か恐れし時ぞつひに来にける  
色褪せてややに冷えゆく友の手を握りつつひたに吾が祈るなる  
張りつめし心くじけて亡き友の軀の上に涙おとしつ  
宵となれば病院を思ふ癖やまず訪ふべき友はずでにありぬを



老の命惜むにあらわわが友の死の上に觀て愛しむとす

靈に捧ぐ

賛 田 清 子

おごそかなる友が辞世のこの歌や眼霞むを拭ひつつ見る

つひの世の君が覺悟の遺言を書きぬる我の手はふるへけり

死にてゆく友が心の雄々しさに涙かくしてわれも語りつ

綿の秀に水含ませてまゐるうするみ唇もつゐに動かずなりぬ

終りまでよくも忍びしとたふればかりかすかに息まひて逝きし君けも

握る手の脈搏うすれいきのを消るゐとするに友を急ま呼ぶ

病院のひそけき眞夜に死にてゆく友の手握り悲しかりけり

臨終までみ心つくし看給ひし友のみ歌は柩に入れむ

みたまま

飯 野 孝 子

歌ひつつ誰か天國に昇りけむ吾が世の果てもかくあらまほし

姉を悼みて

星 賀 富 久

度ましく恭しかりし君なりき今にして懷ふ一節の言も

ありし日の君の事蹟を憶ひ看れげいよま尊くなちかしきかも

悼歌

阪 倉 喜代子

これの世に初めて對面ゆる君なれやみ柩にして深く眠らす

雲霞の奥津城ふかく眠ります友と絶詠とをおもひ愛しむ



故き光子夫人に捧ぐ

吉田 崎子

戦いの終局も見まされず逝きし君のみ魂安かれと切に祈るも

追憶

磯川 芳尾

ゆたかなりし君が歌想も逝きましてさうに心に觸りて憶ふも

村越 氏を悼む

後 藤 治

静もれる聖堂の奥に光やうぐ蠟の灯明り心あるがに

み病を訪はましく念ひしが見知らざるまに過して時機失ひぬ

追悼して

柿 丸次郎

荒原に辞去詠ひて逝きせし君の言の葉は永遠に残らむ

讃美ひつつ祈り捧げて一人ひとりに別れを告げつ君逝きませり

故人を偲びつつ

松 井 太四郎

古を去らば軀はトパズに埋めてと詠みのこしたる君を忘れじトトパズ

故村越氏挽歌

三 保 周 策

旅さきの吾れを追ひ慕し君の訃音起ちつ坐りつ讀み返すなり

振り返りし吾れの涙と君の眼ひたと合ひしが忘らえなくに(別時)

追悼歌

矢 尾 嘉 夫

すでに亡き人と知りつつ万電の宛名あやふく君が名書がむとす

その絶詠よみつつ君の清き死を崇めむとして涙おちたり



亡き村越様に

川崎とみ子

胸ぬちに君が辭を綴りかへし靜かにわれは歎きつつかむ

追吊

木村 本田 鶴子

氷柱より垂りくる雫みつめわつ友の教らせし訃音讀みをへて

戦ひのたけなはなる世に果てまししみ胸に觸れてただに歎かゆ

村越氏を吊ふ

野田 勇吉

現世を靜かに悟り耐へませし君とぞ思ふ逝きたまひしか

しつかるる清水に澄める月如して君逝きにけむ永遠のいこひに

故き村越様に

田名ともゑ

いたつきのつひの心の澈しくて辞告詠ましし君をともしむ

はるかに吊ふ

柏木 天浪

荒原のユタの奥處に逝きませし君がみ墓を吾がしめびをり

村越 光子氏を悼む

神部 孝子

歌を詠む縁しによりて君がみ名東津久仁に知る十年前より

追悼

糸井 野菊

手術うくら朝の心を詠ましぬとおもひぬしとき君の訃をきく

村越氏を惜しむ

永瀬 勇

千代迎きて未だ日浅きに再びを君が悲しみにあふと思へや



懐しといへば癒ゆる日近しと特みつゝありつゝるものを君ゆくりなし

村越氏を憶ふ

泊 良 彦

東津久仁以来歌寄せつづけし唯一人の君なりけりが辭世詠ましぬ

(トバズを往訪せしは一昨年八月末なりき)

わが訪ひし紀念にとたびし筆立てはわれの机に一生のこうむ  
トバズ貝殻、鏝、化石など鏤めし珍の筆立われに遺水り  
ふるまひの度ましかりし君存りき嚴しき臨終きけばかしこし

追悼詞

噫 村越 光子 氏

賛 田 清 子

村越姉と私とは立退前まで北加サンリアンドロに住んで居ました。  
八年前その單獨母国訪問中(神奈川県根府川)御夫君が突然の御逝去  
のため悲しい胸を抱いて歸米された姉は私達のサンロレンゾ・ホーリネ  
ス教會の人となりました。當時私も主人を失ひ同じ心境にありました。  
ので殷々肉親の姉にも勝つ親しさとなつて今日に到りました。

トバズに來ましてから同姉の勧めにより他の方々と共に私も泊先生  
の御指導を仰ぐことになり、時折同姉のお宅で歌會を持つて下さいました。



歌が好きでいつも熱心に精進されました。痛苦に喘ぐ時も死の影の迫った時にも歌を作られた氣魄のある方で、めつたに涙を見せませんでしたが最初の手術後ツールレーキ同人からお見舞の寄書を送られし時は流石に涙を流して悦ばれました。

はるばると送りたびにし寄書に涙こぼれぬ御名前の上に

姉は常に礼儀正しく慎ましやかで如何なる時でも言葉も態度もくづされず各方面に秀でてゐました。トバズ基督教會婦人會の役員として甲斐甲斐しく活動されなお姿が今尚目に見ゆるやうです。又活花にも堪能でした。昨年四月頃より健康勝れず八月入院手術をなされ数方を喜んだのも漸うくで、十月再手術後段々悪化して参り、一月十日午前一時半遂に長逝されました事は實に愛惜に堪へませぬ。この長い間けたの見る目も涙ぐましいまでに毎晩見舞つて看護下さいましたのは歌友高山氏でした。

一月八日朝九時頃病院に行きますと、「今朝六時頃から苦しくていけませぬ」とのこと、さすつて上げますと「もう、うくになりました、そこにあるノートをごらん下さい」といわれますので枕頭の袋からそのノートを取り出し歌の書かれた最後の頁をめぐつて見ますと

我が骸ユタの荒野に埋めてむ八千の同胞にしるしとなして

と正しく辞世の歌！が記されてあり、ついで遺言もなさるので言ひしれ



ざる嚴肅な念ひに早速ペンをとり認めました。死に直面して静かに語る同姉の信仰は實に美しくも切な切ったもので感激の外ありませんでした。その翌朝アンブランスが迎へに來たので急ぎ飛び乗って行きついた時けもはや変った姿！呼べども應へがありません。食塩注射により甦った者の如く語り出しました。そして聖歌一九六番をばつさりおうたひになつたので、感激に充たされて歡り泣く私達に「どうぞお泣きにならないで下さい。先生、私の如うな罪深い者がエス様のみ許へ行くのは恐れ多いことですからお祈り下さい」といけれ、居合せた一人／＼に「長くお話をなりました」といとおを告げられ、又その日の午后には更に私に「ブラツクサ（姉の居住區）の代表の方に造花は固く／＼お断り下さい、この上皆様にお迷惑をかけてはすみませぬから」と申されるのでした。なほ、夜の十時頃迄もとぎれ／＼に語られ、翌午前一時半、数々のよき模範を残して終に昇天なさりました。

姉様の如うな良き信の友、歌の友を失つた私達の昨今！

さるまじだに今年は同胞が東西南北に離散せむとする秋に當り、この信實眞面目なりし姉を遠く旅立たせたとけすことに寂しき極みであります。謹んで、氏の瞑福を祈る次第です。（エタ州トバズにて一九四五・一二五）



## 村越光子氏を悼む

高山 要造

「東洋久仁」以来の歌友——尤も私け氏よりもずつと後輩ではあるが——未だ  
見ぬ歌友への憧憬は戦乱が齎<sup>もたら</sup>した收容所生活に依つて充たされた。

こことパズ收容所に遷<sup>うつ</sup>されて過然にも近い距離の間に住み得た村越さ  
んと私は、その信仰や趣味、そして多少境遇や氣質の上にも似通うた真  
があつた爲か期せずして往来が日に繁く双方の理解は深められて行つた。  
若くして渡米された村越さんは以来健康に恵まれず、随分苦勞なさつ  
たと聞くが、その苦勞が信仰によつて磨き上げられたのが村越さんでな  
かつたらうか。虔<sup>まこと</sup>ましくても静かな、そして一面に女性としては珍ら  
しいほどはつきりした理性に依つて動く強い意志のひらめきが見えしと  
ころなど、慥かに典型的日本婦人であつたと言へる。

氏は昨年の春頃トパズを襲った流行感冒に禍ひされて往年の痼疾にも  
刺戟を受けられたものが、それ以来日一日と腹部の痛みにつれて衰弱が  
目に見え、終に昨年八月には入院して切開手術を受けられたのであるが、  
再来賓に滿五ヶ月の闘病生活であつた。



「幼児のごと泣かば、痛苦も忘れむかつしみといふを吾より去りて、斯ういふ遺瀨のない歌きものさるる程の苦痛を脂汗流し乍ら耐へつづけ、て來られたのである。

賢田さんが季節的に教會や婦人會の用務に目のまはるほどの忙しい中から、隙を見ては病院に駆け行つては何くれと介抱さるるのを、故人は如何ほど悦ばれたことであつたらう！ 私には竊かに賢田氏自身の健康を氣遣つた位であつた。

然るに總てはつひに効なく、多くの友人の心づくしと愛惜とを心から感謝しつづけて逝かれた。せめてここに今四五年の齡しが保たれたならばあの洗練される人格は氣高い澄み切つた歌ともなり、又種々有益な社會奉仕ともなつたであらうに、洵に惜いことであつた。

昨秋は比美美さんが逝かれ、今年け新年早々に村越さんを喪うた私共の歌會は言ひ知れぬ寂しさを感ずるやうになつた。

萬人一様に待ち望んでゐる筈の平和がいつ來るものか、誰にも判らぬことではあるが、お互に健康の上に精々注意して朗らかに歌を詠みつづけ、やがて今の辛苦を偲びあふ日の近からむことを念ずるものである。

故人のみ靈安かれと祈りつつ筆を擱く。（トパズにて）



## 惲村越光子氏

森 本 田 鶴 子

いくさになら前年であつたでせうか。

恰度私のオフデーでした。電話のベルが鳴るので、又學園の用事が知らぬと思ひ乍ら挨拶に出て見ますと、「私は村越光子ですが……」と仰つしやる聲がしましたので驚きました。氏は北加の方で一寸會はれると思つてけるなかなのです。「何時お越しになりましたの？ 唯今どちらにゐらつしやるのですか」と矢継早にお尋ねしますと「今ホリネス教會に居ります教會の年會に出席のため遙々参つたばかりです」との事でした。そして少し時間の都合が出来ますからお目に掛り度い」とのお言葉でしたので、當時羅府の世五街にあつたホリネス教會に自動車を走らしてお迎へに参りました。

そして時間を惜み乍ら私の宅に數刻を過しつつ教壇の話などしました。たが非常に喜んでお聞きになりました。たまたま御里のお話にうつるや私の父の友人たる活花の先生のお名なども出まして、急に十年の知己以上に親しさを感じ、毎晨の村越さんに甘へて見たい様な氣持さへ湧くのでした。氏はオーケランドに、私は羅府にと離れて居ましたが、あそ



こには村越さんがならつしやると思ふことに依つて何か私の背後に力強い感じを與へて下さつたものです。

立退轉佳後はすつかり御無沙汰に過ぎ去つてゐる中に、御病氣、御入院と高原誌によつて知つてはゐたのですが、お見舞も申し送らないまゝ、に御他界の報知に接して唯々茫然として居ることです。

僅か一度の面識ではありましたが、かうまで深く心の通つてた氏を永へに失つたことは私自身の大きな痛手です。大きな過ちを任る様に筆不精の自分を責めずには居れませぬ。歌友としてそして同郷人として二人となひ氏を失つたのです。告別式にも参加出来なかつた今の身を深く歎き、君のみ靈にお詫び致します。

そして衷心氏のお冥福を祈り申します。(ゲラナダにて)

(左二氏追悼歌遲着)

御靈前に

越後 桂子

死に迫さみ命の際もひたぶるに歌詠みまして逝きし君はや

村越 光子氏を悼む

野村 鷹聲

追はれ来し荒野に二歳の假家住居老いませる身に障りけむあはれ



# 村越光子氏を憶ふ

泊良彦

一月拾日夕食を済まして食堂より歸ると居室の前に自轉車を留めて同胞少年二人が待ちうけてゐた。何事かと訊くと電報だとして、乍薄暮微かにウエスタン・ユニオンと讀まれる一通を差出すのだつた。その瞬間頭にピンと来るものがあつて室に駆け込み封を切ると、案の如くそ水はトバズから打電されたもので發信人ムラコシノボルとあり、英文で、  
マイ・マザー・パスド・ウェー・ガス・モーター・ニングとあつた。目附を見るとその當日十日である。

縁かどで恐れてゐたものが遂に來たのである。奇蹟を待つより外今は絶望に近いことを己に聞いてゐたから、驚くこともあまりなかつた。一人の熱心な歌友を喪つたといふ悲歎の念も無論あつたが、氏が永く病苦に呻吟してゐられることを幾人の友より傳へ聞いてゐた私は、どちらかといふと寧ろ安靜な世界へ轉生されたことを同氏のために悦びたい氣持さへ起つて涙も出でなかつた。

居電の打合せせきと私は直ぐ矢尾君を訪うた。同君は「昨秋隔離され



て来る迄トバズに一年の間親んでゐたことは大方の本誌諸氏が知らるゝところであらう。その言ひによれば弔電は明日で充分間に合ふとのことであつた。二人で故人の篤信なことを、東津久仁創刊号以来へ矢尾君も亦さうであつた。曾て一回の休詠もなく續けたほど熱心な唯一人の歌友だつたことなど暫うく話して歸り、所内係安部に弔電を頼んだのは翌拾一日であつた。

數日後トバズの高山氏より村越氏の臨終を書いた手紙に接した。高山氏と贅田氏とは信教をも同じうする歌友で最も故人に親しく、八月上旬氏が入院されて以来幾月日の間毎日欽くることなく病床に見舞つてはその御躬を様みさすりして上げ曾て怠らず肉親にも劣らない程至水り盡せりであつた。實にも友情に篤い歌友信友を有たれたものと村越氏の爲にかねて喜びを禁ずる能けざるものがあつたのである。

この一人たる高山君よりの手紙によつて先子氏の最後の秀でて羨しかりしこと、辞世の歌を残し、遺言し、醫師や看護婦、友人方に一々今生のお別れとお禮を述べ安らかに歸るが如く眠りに就かれたことを知り、その手紙を読みつつ、受電の時と異なり、私は涙が頬を流れて暫うく佇止するところを知らなかつた。それは悲しいためではなひ。臨終の立派さ！篤信なりし歌友を持つたといふ感激の涙であつた。



その後更に賛田氏よりの手紙や兩氏の追悼文を讀むに及び益感心した。私の聞き知る限り同氏の如き立派な最後一而して本當の辞世の歌まで残して逝ける人は千人に一人あるなしではないだらうか！

茲に於て私は更に氏がとつゝに創刊号（昭和十年九月）以來唯の一度も休詠なかりし熱心さと、一昨年八月末尚私がエタにありし折、二〇〇哩を旅して南トバズに往訪した際の同氏の眞面目にして敬虔な態度應對などが深く思ひ合はされたのである。

「人の死ぬむとするやその言ふこと善し」といふものの、一通りの修養や信仰でこの村越氏の如き臨終を見得るものではあるまい。

巻頭所載の絶詠を觀ると、敬虔にして眞摯なりし故人の面目がはつきりと現はれて尊い威に打たれるものがある。これが、その肉體の衰微極つて今生を終へた二日前だつたのである。是に至るともう技巧など問題でなく、唯その透徹せる信念、理念の嚴肅さにひたすい敬禮する外ないのである。賛田氏の文にもある如く氏の夫君は先年氏の母國訪問の留守中に多心遊されたので、そのお墓は多分加州の旧地にあるのだらうに、八千の同胞に殉する心を以てトバズが原に（最初かく作られたものをその賛詞子や甥君達の意見に従ひ、後より自ら改められしものといふ。）  
地を望まれたものと思ふ。感激なくして讀み去ることの出来ない辞世



である。歌は一字をゆるがせに出来ないこと勿論であるが、最後の悶題  
はといへばその心境であり精神であつて、如何に美辞麗句を以てしても、  
一氣に透徹する心力無くしては憂鬱なく、是に到つてこそ歌道と言ひつ  
べきものであらう。私は然か信じるものである。

氏は一回の依詠なかりし程の熱心さであつたが、それかといつて多作  
といふでもなかつた如く拾首以内が多かつたと思ふ。戦前に付未だ努力  
が酬いられてゐなかつたがトバズの一二年間に技巧も上達し深味が添つて  
永年の苦練が遂に酬いられつつあることを氏の為將又高原のために悦ん  
だのである。然るに一時快方を傳へられし氏の病革まり遂に再び起たず  
天若しせめて今二三年の命を氏に與へたら益歌が湧えたであらう。これ  
を思ふと惜まれてゐる。

乍併所関鎖が傳へられる今日であり、同胞四散の日を思ふと、親友に  
看られ、死しては盛葬を受けられたのは矢張り死の時と所を得たものとい  
ひつべきであらう。今の情態と將來の成行を思ふと、とづくに以來の本  
誌がさ、やか下ら餘命を保つてゐる中に逝かれ、斯くして歌友の心から  
なる追悼誌をものして氏の靈前に捧げ得るのは私達歌友としてもいさ、か  
心安んずるものがある。謹んで御霊安かれとその御冥福を祈る!!

(因みに当時は故人の近親もあり、一七日忌の夕追悼會が営まれ矢尾君と共にお参りした)



高原詠草

一

初登山

永瀬 勇

明日はゆきて登らむ山の旗雲にゆらぎつつ現るる初日光かも  
明日はゆかむ山の八谷のくまもおちず晴れて照らへり元日の午右を  
朝日ざし闇けて静けき冬水原一つの鳥の聲澄み透る

陽の温味手に觸る石にはのけくて冬山の上に晝夜みなざうふ  
山の上の冬日あかるし白々と吾が辨当のむすび照らす  
山の上に餅焼きつつ吾がをれば白ひふくれて餅やけにけり  
冬枯れの野の面に低く傾きし日光眺てより山くだりそむ  
けふ一日買籠の紐が食ひ入りし肩流しつつ湯にくつろぎぬ

○

田中 草城

秋草の白へる丘に腰かけて森の紅葉をひとり見入るも  
ひとり見る向ふの森に風ありてしげき梢の紅葉をこぼす  
なでてみる苔やはうかくほのぬくし梢も水来る秋の日光に  
たそがるる池の水面をすれず水に鳴きて飛びしはけだし千鳥か



出でて見る眞垣の外は紅葉なりま澄む秋空眼をみはらしむ

退去撤廃令発表表（九四二二八五食中）

糸井 野 菊

同胞にかかはる憂ひ下心にもち晝餉のつオーけはおきて聴き沈む  
反響は如何にあらむと眼をあげし吾水のめぐりの人黙深し  
出所ゆくにあてどもなしと皿のものの喰べはじめたる翁が咳く  
退去撤廃、自由歸還とひびきよく聞きたる後に重くこだはる  
食堂の低きどよみけ耳底に氣遠くききつ病夫おもふ吾水は  
足下の土に埋る石ふみつけてゐる彼の顔も憂をふくむ

郁子氏に

せめてもよ身は健やかにあらむといましめあひつ互に病み臥す  
堪へがたき痛々日に夜につぐといふ君をなぐくに身ぬち汗ばむ

寒 雲

如 藤 け る ち

天つ陽をかくす寒雲のふち光りつかに見ゆる空明るめり

寒雲は凝りて動かず流るる陽に夕べ一とき雪原明るし

霜ももる大雪明けの朝の道標引ける臺があらけ水にけり

白湯鳴りのなりのさやけき元日の晝をこもりて歌謡讀みつづる

祖国思ふ君が心の極りしみ文の上に淡落ちたり

戦時いま個なる己れに拘けりて思ひし事を下覽ぢにけり



逐はれ来てやや住みつけらるはうからが由々しき時に又遭はむとす(時を)

ヒラ所見、サゲアロ一名ジャイアントカクタス、秋 尾 太 助

雜草稀れに地肌露けたるこの沙漠にサゲアロは立つ怪しきまでに

飛び落ちしいががここだも散らばれり焼石原のカクタスのもとに(ジャイアント)

遠目には枯れがれに見えて沙漠になほも生きつぐこの草木ども

孫子にはかくもありしと思ひいで沈みし心をおのれ勵ます(戦況)

相内の生計いふせく思ふ時蕪武が荒野の月日を思ふ(蕪武をおもふ二首)

いやけての國に使ひし其の髪も雪となるまで羊守りせし

雪 鹿 島 倫 子

黒土につきて消えつつ初雪は積りもあへず夜に入りにつけり

ガラス窓に附着きたる雪は凍てけて花輪の形(かた)の一日消えざり

横なびく吹雪の流れせめぎ入り難(やがた)つ難(やがた)はたまやら消えぬ

背を壁に足踏み難(やがた)てぬ深雪はあかとき闇にふくらみて見ゆ

雪の原牙え渡りたる朝光に雉群れくんだり餌をあさりそむ

冬の雪見のはるかなる湖の耐水脈(なみ)ひく光け流水がただよふ

渚べに波かかぶりしさながらに氷れる巖さびしく白し

流水と雪 尾 川 清 子

雪通す陽に白じらと流水氷の鏡見えながら光るともなし



波の<sup>かたも</sup>盛<sup>も</sup>り上りたる流れ氷のひとつらなりや須臾さうめきつ  
岸邊より碎けながらふ流水の群ひそけきものに見つつ寂しむ  
降る雪はしじに細かに降り脚のみたれざりけりひたすらに斜<sup>はす</sup>に  
濃やかにしじに降りしく<sup>も</sup>ゆるさけ朝目にし見て露<sup>つゆ</sup>とすがひぬ  
今朝や陽の<sup>め</sup>強<sup>め</sup>とく照りて街の雪融けとけ乾く忙しき明るさ  
見の限り雪氷色立ちて陽を反射す雪解<sup>ゆ</sup>の道はうらにぎけしき

雜詠

兒玉なを

鴨江が枯原が中の青流は小波たちて光はうらぐ

工事して間なき堀川が白じろと柵の彼方の沙漠貫けり

うから寄りて睦が寒夜の<sup>きんじき</sup>飲食に胃を痛むわれや一人白湯汲む

歌に心凝りし一日は夜の床に身はぬくもりてなけ眠らえず

人影を凝深き手に抱えたる翁の一生は終ひに要らず(クリスマス祝会にて)

解散のよき名のもとに邦人をまたも社會に追ひ<sup>き</sup>きよと迫る

冬の雲雀

野村 鷹 聲

冬<sup>ふゆ</sup>最<sup>も</sup>中<sup>なかつ</sup>暖<sup>ぬか</sup>日<sup>ひ</sup>つづけるミネドカの原けうらうら上<sup>うへ</sup>雲雀啼く(二月十七日)

上雲雀ひるがる羽根に天つ日の光碎くる冬の空蒼し

昨<sup>きの</sup>のひる野雲雀啼きしミネドカや起き出し度<sup>ほど</sup>に新雪降り積む

金錢にこだはる同胞今にして思ひ到らず悔ゆる日あらむ



天地に恥ぢず男子の信念に生きよと告りて送る母はも（あるとき）  
 病む友を見舞ふと中き義を論じ頼れいぬれば寂しさおぼゆ（Y氏に）  
 買けぬ氣のこの友なれど病み臥せば今日の議論に慎ましきあり

雜詠

貴家しづ子

立退令解けて身輕さおほゆれど出て行くあてのありといはなくに  
 摺れ古りし箒の柄さへ杵の柄となして餅搗き年送るなり  
 手すさびに夫が造りし木の槌に木を喰お虫の音のぐくなり  
 木の槌に觸るれば籠る木喰虫木を喰ふ音のしばしやみたる  
 釘一つ抜くにも力足らずして夫に頼るは時にもどかし  
 隣室の犬の身顔いに床揺れて書きつぐ文字にゆがみ出でたり

柏木天浪

わが心清くしあらなと希ひつつあぜつる人の話をききぬ（仲哉）  
 へりくだる心しなくばいさかひは絶ゆとさるからむ絶えざるものか  
 うれしさが故に微笑みしにはあらぬなり寂なきゆゑにあれば笑みしを  
 歳の暮人混みあへる賣店セウテンの中の空氣にしばしひたるも

おびただしく店に並べし魚より鮓もとめて寂しく歸りぬ

つたなる歌にはあれどやみがたき生きの緒の道と思ひ直しつ

折々の歌

み安高きち



現世の人の言葉を未だ知らず語るかに孫はうんうんといふ  
雪積める松の木の間に年迫る夕べを赤きま陽けかがよふ  
幾度か降り積みし雪四十日餘り日を重ねつつ解くともなし  
雪景色讀<sup>たど</sup>へし昔思はえげ一日二日にして消えし雪なりき  
雪解水焚きし熱湯にソーポとけば白玉の泡と悉くなれり

雜詠

三保 周 策

うねり立つく曠野のあばら家に襦袢乾したりただの一つ家に(途上)  
器具足らねこの食卓の長なりと長男を坐うして心豊けし(クリスマス)  
目に見えぬ時の流れの激しかりき四年<sup>よんねん</sup>前なる今日を思へば(元日)  
蒸<sup>スチム</sup>氣<sup>イット</sup>熱<sup>イット</sup>通<sup>スチム</sup>ふ下水道の蓋あけトラツクの雪落す見ゆつぎつぎにして  
雪原は朝霧ながら枯桑の秀<sup>う</sup>にむらがれる黒鳥こるし

歳末、歳始

和多田 かん

室に似あふキヤレンダ選ぶ掛けかへて子等<sup>こども</sup>和ましく新年を待つ  
立ち仕事坐り仕事とこもごもに産後の弱りいたはりはげむ  
糯米の汽車は着かずと饅頭<sup>まんとう</sup>を蒸<sup>い</sup>して供ふる神に佛に  
外に出でて眺むかふところ山脈の裾<sup>すそ</sup>べある登むまに年明く  
一望に山並澄めるこの朝や嶺<sup>たけ</sup>ことごとく雲まかがよふ  
ロングスの秀<sup>う</sup>よりなだれし山脈は南へ北へ濤<sup>うしほ</sup>まざれたり



## 感動表現の問題（承前）

（充分の暇を得ず、本号に於ては齋藤瀧氏の所説を大方そのまま、省略中略して左に紹介するにといめる——泊 良彦）

### 第三、感動の制限直示の表現

是は母に存するところの感動をそのまま流露せず、之に制限を加へて発露する表現方法である。此の方法は露骨を忌み、誇張を厭ひ、壓迫を排し、その反撥を迴避する時に来る結果の一とも見られ、又幽情、玄微、婉曲を誘ふ心情によつて誘發されたとも見得やう。中畧——この方法は幽であり、幻であり、細みを産みさびを生ずる。中畧——この方面からは象徴も生ずる。感動の制限直示は時の文化文藝的進展により理智的表現技巧の進展によつて、茲に到着したことは争はれぬことであらう。中畧——従つて万葉時代の初期には技巧的な斯る方法はきはめて稀であつたものが、その後期にはこの傾向を現出してゐるやうである。

大和には鳴きてか来らむ呼子鳥象の中山呼びぞ越ゆるる（高市黒人）



何所にか船はてすうむ安禮の踏こぎ<sup>ふみ</sup>行きし棚無し小舟（目）  
斯く故に見いと言ふものを樂浪<sup>がうなみ</sup>の舊き都を見せつともとる（目）

これらは瞑想的沈思的であり、正面よりの熱情的全感動の露出からは遠  
ざかつたものと云ひ得る。

うらうらと照れる春日に雲雀あがり情悲<sup>なさけ</sup>しも獨りしおもへば（大伴家持）  
雲がくり鳴くなら雁の去きて居む秋田の穂立しげくし念<sup>おも</sup>はゆ（目）

夢の逢は苦しかりけりおどろきてかき探水ども手にもふれ收げ（同）

これらの歌は感じ易い心をそのまま叫び上げず、却て客觀的態度で靜かに眼をつつて溜息をつく姿がある。中畧、度ましさと言へばいへ、しほらしさと言へばいへる。そしてこの奥で家持の是等の歌は妙に吾人の心を牽きつめる。壓迫を受けず吸着される。此の吸着性は感動制限直示の要希する處である。抑して來る力でなく引き込む力である。是を遡める時に所謂「細み」の歌が産れる。

この感動制限直示の理智的發展は優麗、婉雅、纖巧の方面に於て長所ある歌を産ましめる一方に於て理智は益々頭を上げる慮がある。

梅の花白ふ春べは藏部山閣に越ゆ水ど著くぞありける（紀貫之—古今）

吉野川岩波高く行く水の早くぞ人を思ひそめてき（同）

石の上布留の中道なるかに見ずば戀しと思はましやは（同）



藏を暗にかけ、流水の早さを引き来り、布留の中道なかに、の音律  
 追従の面白みに捉けられたりする所は確かに機智の現れであり、茲に面白さ  
 をおぼえ巧智を賞するに至つて歌は感動主体より理智主体に轉化した。

(右曰、こんなところから歌が墮落したのであり、後世のへなぶり、狂歌  
 等に脱線する原因ともなつたものである) — 後略。

#### 第四、感動を誘發する雰圍氣構成の表現

是は感動を惹起する対象提示よりも更に機動的とも言ひ得るものである。

即ち感動を誘發する雰圍氣を放つ世界を構成し、その雰圍氣に觸れしむる方  
 法である。語を換へて言へば、その世界の「白ひ」「響き」「色あひ」「光り」「潤ひ」

等で、雰圍氣を構成するのである。吾人が奈良へ行くと、そして彼の大佛、  
 大杉、春日燈籠、鹿、等種々の景色の一々を見ずとも、直に奈良の空氣に  
 ふれて之を味ひ得るゝそして或感動を起す。京都の雰圍氣、……その他皆

それぞれに異なつた雰圍氣を放つ。景物の個々が表に立たずに、これら互  
 一丸としたものゝ此等の構成する環境の雰圍氣が感動を誘發するのである。  
 茲に必要なことはその構成世界である。希求の雰圍氣を發散する如き世  
 界を構成することが前提となる。而も、この世界、この環境そのものを從



立たせるのでなく、紋つ零圓氣、匂いひびき、色あい、光り、潤ひ等に役  
立たせるのである。故に希求の零圓氣が出水げ此等構成の要素たる各景物  
の個々は正直に一つ一つ提示されなくてもよいのである。中畧――

この発達過程の短歌として擧げ得るものに、

見渡せば山も霞も水無瀬川ゆふべは紋と云に思ひいむ（後鳥羽院）

思ひ出づる新たく柴の夕煙むせぶもうれし忘れがたみに（同）

おく露のあだの大野の直蒼原うらみかほなる松虫の聲（同）

即ち連歌体と言ひ得るものが多く眼につくのである。その刻りざるもの  
は異なる曲折であり、かうみ合ひである。（泊日斯るものより社交遊戲を  
まとする夫の連歌の如きものが発生した。因みに新古今後鳥羽院の命に成る）  
斯る発達けまた実に当時の女流の恋歌の影響が無いとは云へぬ。何とな  
れどその種の歌では、最も露骨を厭ひ、思ひせを求める。それ故暗示的の  
要素を尊び、言葉の影、匂を駆使して目的達成を企てる。

（泊日、この方法もその弊に陥らず、善悪が出水げ紅葉を擧げ得る）が、  
三四の方法に属するものには現代歌け多く含まれてゐる。北原白秋氏  
や太田水穂氏らにこの種に近い傾向を認めるものがあるやうだ。この分  
類も古来の歌を大別しただけのものである。私達は略これらを参考とし  
て長を取り短を補ひ、質實寛温を旨として進むが第一である。――後畧――



# 名流短歌評釋

海 山 房

雑誌の巻頭所載、釋迦空氏作品に就てものする。秋氏本名は折口信夫、  
國學院や慶應等の教授たり、一方民族學者としても名ある方である。当初  
の頃はアラウギに作品を発表され、一時はその選者の一人でもあつたといふ  
がその作風は大方のアラウギ流と異なり、故古泉千樞や北原白秋氏らその  
他と雜誌「日光」に據つたこともあるが（日光も見たことがある、二十年位  
前である）その雜誌は永續しなかつた。氏の歌はその書方にも句意を打つ  
ると異風を持つが、詠風に於ても氏独特とも見られる深沈たる觀想の世界  
があり、幽寂な歌調を成してゐる。

の葛の花踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり

歌意は明うかゞ誰にも解るであらう。或日に作者は山路を行つた。すぢ  
と折から葛の花が道側に咲き、その幾輪かは已に道に散つてて、それを踏み  
しんだ痕があり、まだ花の色は生々と新しい。たしかにこの山路を（今も）  
行つた人があるんだなあといふ感じをそのまゝ表現したものである。



二三句が甚だ印象的に描かれてそのために四五句の断定的ないひ方も極めて素直に而も力強いものとなつて秀れた一首を成してゐると思ふ。三句の字餘りのために一層その踏みしだかれた葛の花の新鮮さが出てゐる。なほこの四五句のことであるが、作者は行つた人を見たのでなく、踏みしだかれた花を見ての感じより結びの如く、ありと断定してゐる。にも関わらず些も不自然にひひかずむしろこのために力強さまで感じしめるのは二三句の鮮かな印象句によることでは上にも一寸いつた通りである。又、歌の餘情として誰かが自分のさきに行つたなあ、と、その人に想像を及ぼしつつ山路を辿る作者と鑑賞していい。

○山川の激<sup>せき</sup>ちを見れば、はらばらに満ちわかれ行く音のかそけさ

挽歌でその恩師三矢先生を悼めるものの一首で、先生病篤さほど事ありて箱根堂<sup>はこねどう</sup>に籠れり、といふ添書がある。追憶の歌である。三句以下は、うばかに満ちわかれ行く、會者は離生者必滅の哀感を言寄せたものと思ふ。唯の殺景としてもよいが挽歌として鑑賞するとき結句が餘韻あるものにひびく。

○はかなさは 巖の下に人死にて しらせある日も、客みちて居り

「巖下」の中とあり、文学士某が岩の下敷となつて惨死した旨の詞書ある歌である。四五句より察するに作者は旅宿か何かにあつてこの凶事を聞いたものであらう。(江の島に於てのことの由)はかないことには巖の下敷



となつて人が死んだその悲しい報せのあるこの日でも客が満ちてゐるとい  
 ち作意。この結句「客みちて居り」に作者の錯綜せる哀感がこもつてゐるも  
 のと鑑賞すべきだらう。客の中には悲報をきいて悼み悲しむ者、又それに  
 何の拘はりもないかの如き素気ない人もなかつたものでもあるまい。それ  
 と、この客のみちてゐる所と凶死の場所とは何か近接せるものが感じられ  
 る。氏のその折の他の聯作とつへるものを調べてみたら分明するかとも思  
 ふが、今はこのまゝにする。ところでこの第一句であるが、斯く初句に主  
 觀を露呈する発想は勅選集時代に多く、現代では白秋氏あたりに見る傾向  
 であるが、一首の餘情を洩くする嫌ひがないでもあるまい。唯この作は結句  
 に充実した力があるからさほどに初句が難たらずに済むとは思ふけれども  
 やはり氣にかへり、めつたに眞似べきことではない。

ありありて、<sup>着欲</sup>もき帯も買はざりし かかる悔みも、今は言ひけり  
 下婢三上愛子の死といふ詞書がある。ありありては在りて在りて、即ち  
 久しく世に生き存へての意であるから、生きてゐた間は欲しい（着欲しと  
 書きあらすことにてより現實感がふかく出てゐる）帯も買はなかつた（そして  
 貯金せむとしたの意を含む）とこんな悔み今は言ふことだわいの意。結句  
 言ひ、上のも字見落してけなるまい。種々と下婢を惜み歎いた末に、人間  
 としての愚痴めいたこんな悔みも今はといふほどのこゝろだらう。



○山びとは轆轤<sup>レリ</sup>ひきつつあやします。わがつく息の大きと息を

轆轤<sup>レリ</sup>は圓い木を廻らして重いものを割に軽く動かす様に仕掛けた器。作者がいつか山村に行つて行きあつた時のものとみられる。普通人の歌境は異なる世界で何かグロテスクなるものを感じる。氏の個性あるものと思ふ。北原白秋氏は秋氏のかうした歌境を万葉の高市郡人に比し更に奥深く入つてゐるといつか書いてあつたのを記憶してゐる。意味としてわかつても何か説明しがたいものをこの作に感じる。奥深い心と息である。

○髪<sup>ケ</sup>髻<sup>マユ</sup>顯つ。速吸<sup>ハヤヒキ</sup>の門の波の色。歳の夜をすわる 蟲旦<sup>ムシタニ</sup>のうへに

初句は景象が際立つてけつきり顯はれること。作者は民族學者としての研究のためであらう、よく諸國に旅行されるやうで、この歌も旅中の歳晚に夫の速吸の門に對つて看られるものと思ふ。歳の夜たたみの上に坐つて眺めると（夜にもかゝはらず）その速吸の瀨門の波の色が際立つてけつきり顯はれ、たと表面の意味はそれだけであるが、旅人の、歳の夜をすわるたたみの上にの心持を察すべきである。

全てのよき歌かさうである様にこれも多くの言葉を要約有譽されてゐることを心において鑑賞すべきであらう。



高原詠草

二

病みて

上田綾子

常の日はおやつねたりし子供らものしづかなりかなしままで  
昨日は快く今朝は臥りて朝々にさ搖ぐ信念をわれと悲しむ  
隣室に鶏焼くるにほひをいふ子らかまづしき夕餉にむかひ居にけり  
朝霧のうするるなべに浮き出でしダニエルフイツレヤの塔の鐘鳴る  
ためらひて餌を見てゐたる雀うの一羽下り来れば皆飛び下りぬ  
淡き光を浴びてうづくまる雀二羽地に影おとし黙深く居り

雑詠

原 上長 叫

夜明けゆく光かそけき雪の上に雀と犬が氣張りむきあふ  
モデルわ水姿勢とる間をひたすらに美しさことのめ思ひみむとす  
モデルわが呼吸の亂れを静かなる畫房の中におの水聴きたり  
描きかけの老婆の顔の怪奇めく夜のアトリエに木枯ひびく  
目の下の黒ずみきたり言さへも激しくなりぬ社會に出で行きて

砂山

柳本 錦子

澄み透る朝空の下に珍石拾ふ砂山閑かにも鳥が音きこゆ



石探す砂山の斜面の暖かさ冬の最中にポピー花咲けり

チヤイナランタン、デザートリリー、ライラック、ポピーも咲けり冬の砂山に  
晴水渡る真ひるの砂原に火を焚きて肉は焼きつつむすびを食すも  
積雪の漸るにまたも降りつむと冬の永きを吾娘かこち来ぬ(娘東都に)

別離

升谷千代

別れゆくとのたまひてより何するも心樂はず日を送りけり  
二年餘り真心こめて教へられし思へば更に離れ水がたくあり  
清うけく優しき恩師の面影を一生保たむわが胸ぬちに

とれの世に別るることの悲しさを初めて知りて別れせろかも  
み冬づきややにきびしき冷たさにわが身も心もひさしまりつつ  
雨雲を背後に日光さすなぐにきけやかに見ゆ今朝の岩山

雑詠

高橋東民

窓ゆさすみ冬の朝陽背にうけて身を養ひつつ歌に親しむ  
細々と命保ちて又迎ふ苦難の年を生きぬかむとす

かゝる地に住まるるものかと思ほえし沙漠の中にも三年過せし  
来るべき明日の備へのきびしさに思ひふたりて心冷えゆく  
などかくは心おののきつぐものかその因るところ我が知らなくに

案山子

鈴木緑松



漸く秋の名残とどめて畑に立つ寒山子の鳴子日もすがらなる

畑に立つ破れ寒山子の望の上に馴れ親しみて小鳥囀る

夕ぐれは荒畑の寒山子がさるがうに旅人に見えて哀れと思ふ

夕映け破れ寒山子を彩りて秋の名残をとどめたりけり

夜汽車にて

大空

魁

時どころえず熟睡に落つる友を羨しみ思ひつつ我は雑誌讀む

合圖する驛夫のこゑす吾が汽車は今ゆるやかに夜半の小駅出づ

ゆるゆると動き出せし吾が汽車の車輪のましま聞きつつ寝入れり

冬の心

田名とも

まきぐしさものにうち対ふ氣構へけ年の終りも始めもあらす

待ち設けしものの如くに帰還る家かお箱の薄穂枯芝に白し

この後の生活難しと人け言へど生くべき命持ちたり我は

虹消えて陽光寒しと見る野末に雀氣樓の町しまし明るし

うつしゑの父に祝詞を申す子のうしろに立ちて涙しにけり(元朝)

くさぐさの歌

松浦清子

つつましくよき春なれと幾年か希ひつづくれいよよ陰しき

ゆづりあひ慰めあひてこの三年過せし比良を我家とぞ思ふ

後の家も三年住まへば落ちつるぬ戦時中は移らずと諸人へる



今宵征でし父老の泣ける幼子の聲が隣室ゆゑに霜の夜更けゆく

おのおのに理深くこもれるを年経りて思ふおろそかにせじ（ある事にかんじ）

折にふれて

井上 廿談 野

賜はりし眞白小菊をみ佛に供へて禮拝しむすがしも

この山岩また歳歳のこごしさに冬月寒く押し照らすなり

朝寒冬にはとりの餌に初雀三四羽下りてあざろけ和まし（新年）

寒月夜計給作ると男の子らの手つきたどたとほほえまれぬる

○

山田 俊吉

霞立つ岩山裾の土人家のま近く今朝を雲氣縷見ゆ

冬草のいつしか伸びて青みたる双峯の山に登る人見ゆ

あるとき

越後 桂子

火の如き憤りを下心にわがもちて寂しき今朝の庭の霜踏む

よしあしをさけむる術なみ感情の乱れしままにもの言ふにけり

をみなわが感情のみだれすべもななく人をし避けて部屋にこもれり

音あらく屋根打つ雨をまがらしみ真夜の臥床に醒めてききそり

病友

中川 末子

病が體白々に衰ふ思ひすとのらす病友はも心弱りしか

夕闇に涼雪光る道の上を病む友見舞ふと心せき行く



窓越しに見やる君が邊燈の見えず手術の後のおぼつかなきに

御容態如何にとのぞけば暗闇の部屋にし君が深き呼吸のみ

かがり火の足しさ炎立圍みつつ面を嚴しや戦場の兵は（雜誌を見て）

山月 静 意

硯石く墨をも持たず館存にして絵の具をとかし歌をうつすも

己き母の好みたまひし柿の實の奥むきにつつおもかげ徳ぶ

友通きて集へる人らうち黙し冷蔵車の音の静寂にひびかふ

歸り行く友を送りて庭に立ち仰げば更けし月影寂し

夕暮れては草食める親牛のあごの下べに仔牛いねをり

風邪に笠靡りて

三原 かつの

年立ちて髪に簾に籠らへるわが肩を操ります夫のねもごりにして

夕の闇けば雪吹き送せる寒気が市の衝を通りて静寂を來

魂合へる夫とし棲めば何事も思ひのままに語りお樂しさ

（どうしても此大話を見なければ瞑目出来ぬと君言ひしを）

日輪の沈むが如く逝きましし君が一生に無駄けなかりき

荒原の假舎に病みて命絶えし君の葬りの何ぞさびしき

血液検査

春野 陽子

赤黒きわれの血しほは透きとほるガラスの血管に今し満ちゆく



針さして血をとられたるわが腕の動脈太く浮き出でて見ゆ」

時ならずメスの早鐘鳴りひびき幼児見えずと人打ちさやぐ(幼児人行衛不南

秋の陽は早や傾くに幼なるの行衛得わかず憂ふ深しも となりし時)

探し出しめと叫ぶをさきて駈けゆけは自動車の中に幼児は笑みをる

自が家の在處もわかつたそかれのせし藤の葉に迷ひたりしか

ペヤテ河南支流谿谷に岩の標水標集。山 本 徳之助

岩層は彼方むきこ向きにうなるかぶし道行く吾水の好奇心若くなり(車上吟)

地殻の動揺激しかりけむ此峽のたたるづも岩層にその痕跡しるさ

標本を得まく岩盤に金槌打まげ鋸は高し静かなる山に

谷川に小石聞し一つ奥の岩の質鑑別むと専らなりけり

小谷べに藤折り敷きてしまらくを憩ふ身に沁む山の土の香

眞晝陽にかかよふ山脈の谷筋にアルプス梅の柱立巖つし

雜 詠

阿 部 た 子

暖かき部屋に吾子うと絵合せを遊びつつ雪の一と夜を更かす

に真冬ともあらぬおだしき陽光を浴びて水肌よ立ちたつ蒸気を見てをり

憂心ゆたにと念ひオパールに経ひし小魚も拙なかりけり

幼などち外に出でたれば静かなり陽光あふるる部屋にもの経ふ

いちけやく歸り行かすかよき友と交はりし日も夢のみなりし



○ 眞意しき時相に心とらはれて新年の祝詞もやすくは出でず

歎ぐ日の通れる吾娘に支度すと樂しき中に寂しも母はけ  
むらぎもの心つくして言ふし吾娘の晴水の目に何の涙ぞ

○ 光線をうけて嬰児すげゆげに開きしまるこたまゆらに開ぢめ  
朝々に寝さめの床に歌おもひわ水の一日の生活に入るも  
阪倉嘉代子

後藤 治

○ 逐はれ来て老の寂しき柵ぬちに歌を學べげ心細むるり

歌を練る心つかれぬねむりぬ暖爐あかあかと夜は更けたらし  
斯くあらむとかねておもひわしが布衣の早きに過ぎて自がなす術知りず

雜 詠

大平 澄 治

○ 秋雨の立日のきやりき閑空に千鳥かすかに啼き渡りけり

高らかに道説く人けありといへど正義貫く士ぞ難なる

時雨して隙もる風の寒けきに今夜もひとり書讀み更けぬ  
白日の長雨霽れしあを空に初日耀ひて現る身照らす

○ 西山に有明月は残りつつほのぼの明けゆくローワの森は

山田 立 枝



何故の神のとがめか現身は餘病次つぎに臥りくうせる  
ほとほとに一生病み臥り過ぎむとすこの頃餘生の沁々思ほゆ  
戦ひは日に日に酷く厳しくて果てし知らえず年重なり

雜詠

矢形溪山

今朝の火事に撒かれ水は滴る間なくつららとなりて籬に光るも  
黒々と煤煙にまみれし群雀みな空へに砂をあびをり  
雪ぐもり行く手見わかぬ湖の面ゆ蒸汽船の汽笛か絶えず鳴りをり  
召さ水ゆく息を祝ひての音信は子なき人にやと妻に訊きたり

折々のうた

佐藤不二子

手鏡はめし三人の口へと憲兵が煙草に火をつけて喫けすやかしさ(アチキヤス)  
移りきて馴れぬ薪割し一つありこれにもこつのありて習へる  
尼僧らにまじりて吾れもクリスマスのまらうどとなり相祝ふなり  
床並めて我と寝ねる幼な孫聲立てて笑ふは夢見たるらし

赤星さと

昨日降りし雪は氷りてしたれたる精美しく冴明けにけり

寄り集ふ牛らに揺ぐ氷の雪はけらはら散れりその牛の北月に  
カーロード運びし吾子の服洗へばかくしより裾より石炭屑出づ

雜詠

安井静女



ブラインド引き忘れたる明の窓、火事とまがふかに空焼けてをり  
 高原のみ空美し明けくれに雲の行き交ひみとるる時あり  
 飼主の急死も知らず、かめ戸に頸かたむけて待ち居りぬ小犬は  
 母の手織愛しまるる心地して、今日もまとひぬ時代おくれを

ある雪の夜

梅本 静恵

下心堪へむこゝろ思へば涙なきやよき面てぞいとしまれぬる（討死する子の母）  
 讀經のみ聲に觸れて凝水るもの溶くるが如く涙おちたり  
 捨てし湯に氷裂けたる朝の地須臾に凍てゆく湯けぶりの後を  
 子ら散りし夜のスキ場、遠の灯の映りしづめば深湖のごと  
 折々に差す日に照らふ凍て道の氷の光わが眼に痛し

雜詠

西村 津矢子

ひたむきにあれなと吾は言ひつれど若き命の胸に迫り來も  
 病める子のいぶき聞きつついねがてぬ夜半を風かも窓ゆすりゆく  
 吾が家に歌友を迎ふと朝またさ目さめて心はづみるるなり（歌友を初めて  
 一年も今宵に果つと書持ちし吾が手の面にしばし見入りぬ  
 寂しさを言にはいはずひとりなる家、寂る若妻のレデオひびかふ  
 折々にうたへる

折々にうたへる

吉田 晴江

地郷音をたてて山崩れし屋根の雪、日向に遊びし雀こび立つ



高原選抄に就て

追はれ来て物みち捨てぬ今たに歸還もならず行かへに迷ふ(キヤン・肉鎖 帰還今出づ)  
男の子等は召出されて老の親の再建の意氣力に添はず  
時の波に追はれ来たりしハート山に忘れ難き友得つる嬉しさ

○ 横澤 觀 月

クリスマス飾りくはしきに心ひか小歩みとめて見ぬバラツクの前に  
収容所に籠り暮らしつつすてにして三度目の雪の歳く水にけり

アングソングム附近

杉浦 健

見下りせばダム造る人等動きあひ土運ぶさま蟻にさも似たり  
呻り凄く火の頂に迫る時就鳥一つ狂ふは巢を持つならし(山火事)  
嶺も谿も動かぬ霧におほはれて激ち行く水の音のみぞ聞ゆる  
凍てけてしこの山谿は音絶えて真冬の静寂到りけるかな

現代秀歌選集企画のことは既報の通りで五月中旬頃迄には出来るつもりですが、希望により高原選抄を紀念として作っておきませう。  
就てはそれ自詠を収めた方左記諸項に據り期日迄に寄稿を乞ふ。  
一、昨年来發表の中より各自。参。拾。首。自選。二、一首を紙の上より一行に。  
二、枚に紙の一面のみに正しく認め。三、五。月。拾。日。迄。九。号。迄。の中より自選。  
四、原稿を呈出せざる人の作品は採録せず。五、呈出歌を更に当方に採録す。



## 前號 數氏作品に就て

糸井 野菊

齋藤茂吉先生は「歌は己れの分身だ。一首を詠ずれば即ち自己が一首の  
恋歌として生れたのだ」と曰われた。そこで自他の歌を批判し吟味する場  
合の心構へとして、歌とその作者を一元として観なければならぬことに  
なり甚だた敷くなる。酷しく考ふれば、同時に又その批評の中に評者自身の  
全體が映され、生きた正確な呼吸が通つてゐねばならぬといふことにもな  
り、やゝこしい次第であるが、兎も角勉強させて頂くつもりで新年号の中  
から眼に付いたものを拾つて見様と思ふ。

○西北野を乱れあがりし雁の群、城山の空に列やや整ふ（泊氏）

右の一首に心惹かれた。如何にも寂びの透つた歌だ。二句の乱れあがり  
いゝが結句の「列やや整ふ」に働きかけて遺憾なく一首の統一が完成された。  
氏の温雅な歌風は多く叙景歌に於て秀れたものを見せて頂いた様に思ふ。  
三首目の「原稿紙のべたる前に一房のきくや、次の青竹助だつわが手の甲が……」  
け手輕に詠み上げられ乍らもの寂びた生活の一面と感懷が映されてゐる親  
しまれらる。

○一の子はわがふところにしがみつき離れじとすも二の子来て引くに（永瀬氏）



氏がよき父としての生活の現れを佳作と思ふ。氏の作品はもう長く見せて頂いて来たが近頃一般の進境が見え手堅いものになつて来た。この一首では三句の「し、が、み、つ、き」といふ調がいかにもよく効いて全体を生かし切つてゐるのは氏の手腕である。三首目の「たづな、まて、の、歌、の、結、句、唄、ひ、を、り、き、こ、ゆ、」の句法であるがこの頃頻りに斯う云ふ句法が眼につくのは私の気のせいかもしれないと思ふ。

○枯伏しし蘭草のうへに雪ふりて乱れしさまに野の面影れそむ（矢尾氏）

最近氏は目ざましい進境を見せて下さる一人である。右の一首も秀水である。四句の「み、だ、れ、い、さ、ま、に、が、」一首全体に響き渡つてゐる生きた「い、」句だと思ふ。冬野七首それそれに同所の持味あるものと思ふ。

○ひとなだれ夕べの空に朱雲のたちのなびきにわが心燃ゆ（田中氏）

東行途上といふ詞書と照合して讀んで行つた終りの一首である。旅から旅にちき夫人の骨を納めた壺を抱いてゐる作者である。出所して今度ばかりも得合かぬ未知の地に赴く汽車の窓で、赤い夕焼の雲を眺めて感慨深く心が燃ゆるといふ意であらう。益良夫振といったものが語勢にうかかはずるが、四句の「た、ち、の、な、び、き、に、」といふところ調子が流れすぎてゐた憾みがあり、結句もそのために何か落着きのないものを感じる。一首の素材といふからいつても新しいものと思はれない。



○こぼれたるものの如くにぼつちりと仰向けのまま蟲は動かず（加川氏）

詩人加川氏と夫人桐田氏のお作はいづれも澄んだ詩心から把握される奥に心惹かれる。この一首氏の選境を示すに足るものと思ふ。こぼれたるものの如くに……詩人の直感がそのまゝ言葉となつたよさを見る。

○他人の血と吾が血のなる反應がむづかゆく顔にけうせ出で來ぬ（仁熊氏）  
病床吟の中で今度の輸血の歌は殊に佳いと思つた。右の一首がその中でも最もよく、初句よりとどこほりなく詠み下してゐる手腕は將來を思はすものが充分である。

以上教氏の他に加藤氏やなほ茂氏かゝれに注目されるものがあつた。總体からいつてもつと大膽に掘り下げたところの、一步を踏み切つてゐる勇氣が欲しいと思つた。まだまだ之等の作より諸氏の手腕はかくされてゐる筈だ。不安だと思ふステツプを踏み切る氣慨が西來されてよいと思ふ。

全般の傾向？として近來感ずることはどうも破調型が多過ぎるのではあるまいか。勿論時と場合では字餘りにくからずであるが、もう少し用語の敷理と省畧といふ奥にも考慮されてよい様に感じてゐる。勿論用語の整理省畧とは、内容の省畧を意味するものでなく、語句法の洗練である。妄言多謝。

（二月六日）



# 数首短評

白くくきり

病床から糸井氏が歌評を寄せて来た。僕は成可くその言及せざる諸作に就て短評することにする。

○おのが躬を愛しみ思ふさくさくと林檎食みぬる自の側に覺めて（尾川氏）  
小恙と添書のある尾川氏の作である。未だ最後の表現に達したものと  
は言へないと思ふが、この倒格といふことも果してこれがよいか疑はし  
いのと病中吟といへ気分が甘さがある、さく／＼と清しい音を立てて  
林檎を食みぬる（健康な）子の來てぬるときに目さめて自分の身をいとしみ  
思ふといふこの病中感の中には、子に対する愛と自身を思ふ心とが織り  
込まれて哀愁が難い。次の

○煤けたる練瓦の壁が迫り合ふ底より仰ぐ空細長し

は大都のビルディング街の觀として一應注目されるが結句が常識的で  
それは事實に即したもののなことは知るが物足りない。こゝらに眼の牙  
えが希求されるものと思ふ。因みに尾川清子は園枝折の本氏名である。  
○恃むもの心に熱く持ちあつひそかなる生活（鹿島氏）  
今日もたてたり（鹿島氏）

作者鹿島氏は森みさの本氏名で尾川氏と共に新年より本名に復つたも



のである。右の作かなりに沈滞された気分のだつたものと思ふが、  
 〇三〇廿さが目立つやうである。なほ、落葉巻く嵐の、の一首も捉へ  
 えてゐる。この結句は流氷かめでを書きおとしたもの序でに訂正しておく。  
 〇三千尺のほさの紅葉は夕つ日をまともにも受けて照りかがやける（高山氏）  
 〇頂きの木末をわたる秋風は麓の楓に及ばざりけり（三保氏）

同日に同所に行遊せし紅葉谷の歌と思かれる。前作では、三千尺のほさ  
 の紅葉に簡素で手堅いところを見せてゐるが作全体から受ける小味に不足  
 が感じられる。因みに、ほさは断崖絶壁のこととてこの詞のために生硬を免か  
 けてゐる。後者の把握はいゝこれに表技が伴つた秀作となつたであらう。

〇隣室より泣く嬰児あやすとひたすらなる異人種のことかなしくきこゆ（兜玉氏）  
 児玉氏の歌大体に特徴が少くて目立たないが氏も亦この一二年に進歩し  
 た一人といへる。落着のある人柄の見える作が新々あつた。同胞に交つて  
 少数下り白黒墨婦人もキャンに混入してゐて注意したら捉へうるものがあ  
 る筈だ。この作今一段のけつかりした具象化加なると物足りない憾みけあ  
 るけれども先づ無難なものでないものである。

〇天づたふ冬陽常のごと照らせども熱なきものの如く冷たし（安高氏）

四句まではそのない詠み振であり、四句はよいが、結句がいさゝか四句  
 の繰り返しみたいで、こゝらに一段の工夫が希求される。冷たしをもう一歩  
 身に引きつけた現はし方がないであらうか。以下畧。



# 高原詠草 三

斑雪

矢尾 嘉夫

霜庭を掃くと幾朝凍てつきし密柑の皮が土中剝がれず

しもどけの蒸氣立つ野べに朝闇けし光を吸ひて石ぞ乾ける

寂かなる日差しの庭に枯芝は立ち直りつつ斑雪浮けたり

晝過ぎて動く風あり霧ややに退きつつ野べは霧草のひかり

日脚やや延びしと對ふけふの入陽キヤスルロツクをすでに外れたる

さむざむと見て侍ちにけり雪のうへに日ぐれをそよぐ枯草の影

道の上や破れ窓うつろに見送かされ北戸の冬度いたく明るし（梅外近く亮  
水たる雪辰家あり）

○故国よりの慰問書簡稿の中に昨年九年八月刊か注田先生著万葉集評釈あり

健やかになほ在はしまし大先生が編ましし書ぞ線りひろげつつ

雜詠

加川 文一

湯氣こもる風呂場を出でて外に立てば月にかがよひ雲流れぬ

あてありて飛ぶゆくらむか眼に追へば雲こころ空を鳥ひたにとぶ

裸體画を壁にはりたる若ものの部屋に入り來り燈を浴びて立つ



生きもののしるし見せてカクタスはあはれ棘にて身をつつみたり  
親と子けこにもありて沙原のカクタスは子も棘をつけたリ(マンザナ追想)

折々に詠へる

綾 織 謙 介

昨夜の雪積みしままなる朝道を足痕つけゆくは漬すが如し(夕方に雪降し時)  
雪解けて間なき枯草生に薄日照り鴉呆けしさまに集りあつ  
剃りたての頬にきびしき今朝の冷え寒暖計をのぞき見にけり  
日は照れど斑雪凍水る暮の蒼年の名残にもとほりにけり  
就くべきにつきて移さるる若きうを眼熱くして今日も送れる

冬 雑 詠

山 内 曾 六

今宵ふと戸口に立てば氷雨降り庭石の面に軒燈ちうつく  
庭石の端に枯れ寂れたる蘭の草の今朝あらはにも露氷つけをり  
庭り陽にまぼしみにつつ見渡へば廣しと思ふ今朝の雪野を  
降り凝る小霧は地面に消ゆと見えて直ぐに凍まつき雪ともまがふ  
宵雨は空洼地に満ちて軒々の灯の影ながく水面に映らふ

○ 村 上 正 男

雪雨はさしてしげしと思はねど道の窪處に水溜り申々  
大石の御割衣の大み歌 詩の會を今日とけりうたふ畏こさ  
激風に伏しなびく煙も陽光に吹き動さつつさやかなりけり



病院の規定<sup>さだめ</sup>は背<sup>か</sup>はず妻<sup>め</sup>の君<sup>きみ</sup>に看護<sup>かんご</sup>迫<sup>お</sup>りしと聞くが悲<sup>かな</sup>しさへ推<sup>お</sup>崎<sup>さき</sup>氏<sup>し</sup>を悼<sup>なげ</sup>む

### 弾丸散

曲豆 福 昌 範

水涸<sup>く</sup>れし冬川の洲に新<sup>あらた</sup>しき彈丸<sup>だんがん</sup>散<sup>さん</sup>二つわが拾<sup>ひろ</sup>ひけり

川のべに拾<sup>ひろ</sup>へる彈丸<sup>だんがん</sup>がら掌<sup>てのひら</sup>にしつつ命<sup>いのち</sup>果<sup>は</sup>てけむ生<sup>いき</sup>ものと思<sup>おも</sup>ふ

朝<sup>あさ</sup>未<sup>み</sup>明<sup>み</sup>土<sup>ど</sup>手の向<sup>むか</sup>うに焚<sup>くわ</sup>火<sup>か</sup>して話<sup>わ</sup>すこゑごゑ聴<sup>き</sup>き覺<sup>さ</sup>えあり

### 雪のころ

宮 村 一 雄

雪<sup>ゆき</sup>の尾<sup>お</sup>に眞<sup>ま</sup>向<sup>むか</sup>ひ走<sup>は</sup>る赤<sup>あか</sup>列<sup>れつ</sup>車<sup>くるま</sup>薄<sup>うす</sup>日<sup>ひ</sup>に映<sup>うつ</sup>えて陸<sup>りく</sup>乃<sup>の</sup>ごやけし

夕<sup>ゆふ</sup>日光<sup>ひかり</sup>淡<sup>たん</sup>くかげらみ雪<sup>ゆき</sup>解<sup>と</sup>野<sup>の</sup>の焚<sup>くわ</sup>火<sup>か</sup>の群<sup>ぐん</sup>にわれも交<sup>ま</sup>れり

あけあはと沈<sup>しず</sup>む冬<sup>ふゆ</sup>陽<sup>やう</sup>の光<sup>ひかり</sup>寂<sup>さび</sup>し見<sup>み</sup>知<sup>し</sup>れる犬<sup>いぬ</sup>の丘<sup>かみ</sup>をかけゆく

穴<sup>あな</sup>に入<sup>い</sup>らば穴<sup>あな</sup>を喰<sup>く</sup>ふ虫<sup>むし</sup>ともなりぬべし時<sup>とき</sup>の宿<sup>しゆく</sup>命<sup>めい</sup>に身<sup>み</sup>はゆたねたり

### 新年

吉 松 博 志

をさめ持<sup>も</sup>てる父<sup>ちち</sup>母<sup>はは</sup>の位<sup>ゐ</sup>牌<sup>はい</sup>を机<sup>けい</sup>の<sup>の</sup>上<sup>うへ</sup>にがざりて隔<sup>へ</sup>離<sup>り</sup>所<sup>しよ</sup>に年<sup>とし</sup>迎<sup>むか</sup>ふなり

降<sup>ふ</sup>る如<sup>ごと</sup>く雲<sup>くも</sup>間<sup>ま</sup>浅<sup>あ</sup>水<sup>みづ</sup>射<sup>さ</sup>す初<sup>はつ</sup>日<sup>にち</sup>光<sup>ひかり</sup>吾<sup>われ</sup>背<sup>せ</sup>に温<sup>ぬ</sup>かし午<sup>ひる</sup>後<sup>ご</sup>の一<sup>ひと</sup>時<sup>とき</sup>を

生<sup>な</sup>くる道<sup>みち</sup>に幾<sup>いく</sup>筋<sup>すぢ</sup>ありとも吾<sup>われ</sup>が道<sup>みち</sup>に二<sup>ふた</sup>つあるなし歸<sup>かへ</sup>りてまゐすべし

### 母の命日

沖 宮 求 香

古<sup>ふる</sup>稀<sup>き</sup>にして逝<sup>し</sup>さ給<sup>たま</sup>ひたる母<sup>はは</sup>ながら吾<sup>われ</sup>水<sup>みづ</sup>旅<sup>りょ</sup>にゐて仕<sup>つか</sup>へまつらざる

ひたすつに心<sup>こころ</sup>をこめて祈<sup>いの</sup>るなり逝<sup>し</sup>きにし母<sup>はは</sup>の御<sup>み</sup>霊<sup>たま</sup>安<sup>やす</sup>かれよ

### 朝寺

吉 田 き み 子



發月に映え光りたる霜踏めり心淨まり朝寺に詣づ

ここに於て老も若きもメスに集ひ夕餅もむさま和やけし

つれづれの収容所の生活に倦むことあり何かを求めて眞劍に活きたし

別離

上村比呂子

かくまで親しみ友か別れゆくこの悲しみを耐へ難き思ふ

見送りのどよみ早くも遠のきて心入に揺られつつわが頭重し

昂りし感情やややにしづまりて身は疲れたり遠行く車に

朝明より行きゆく荒野けてしなれテキサス州を一日横切る

抑留も二年を経ぬれば家も庭もよろづととのひて同胞住みつぐり

雑詠

山本志満子

親しかる友移りゆきて慰まぬ日のつづけるを寂しみおもふ

ここに於て小雨降る日のひそけさる世に戦ひのありとも思えず

さ庭べの穴洼處に今宵溜る雨水弦月の光りを細く映せり

交換船出づとし聞けば恃めなき思ひしつつも心ひかるる

くさぐさの歌

渡邊あい子

歌詠みを書きつづけよと新年に作りたまひぬ短歌日記帳を

こゝろ眞に觸れて生きなげかくまで心迷ひはあらざらむもの

朝日子はいまか出づらむや遠さ山の麓あやに雲光り初む



遠行くも隔離所にしあるも國民の一人たる覺悟し本とこそ思へ

落度<sup>おちど</sup>なき手續<sup>ていじ</sup>をへてその最後の手段<sup>しゅだん</sup>は静かに時を待つべし（實事多き中）

### 冬折々

山本 雅子

冬<sup>ふゆ</sup>光は俄にかげりて虚寒し軒下の斑雪しろしろ目にぬむ

冬の陽のしづかに射せる墓標前、雪地冷々と疑こらかれる

冬空の電線にかかりて乾きたる雀のあくろ幽かにゆれる

人類の動乱の渦中にとび込みて眞劍に生きなしと思ふことあり

○恩師よりセコエヤ大木の墨絵をたまはる

雪山風にこごしく立てるセコエヤの墨絵給はたと息ひそめ觀る

### 嬰子

川崎 とみ子

嬰子のかみあげては泣くごとき挽まぬこゑは室に満ちみつ（五月男室）

赤子らがこゑ満ちみつる中に堪へがたみ廊下に出でて息づまるなり

堪へがたの息苦しさにとらはれつ心おとしも赤子を疎めりし

筆おきて心疲れに眺めをりわれの描きたる茄子二つを

ささやけき樂しみごとに繪を描きて雪明る夜の道戻りをり

### 病中吟

仁熊 登美子

この中に入水よと急かれ石床におざりよりつつわがゐるゐぬ

二十餘人並み臥す病室に交はりてひとりキグスの床に入りけり



吾れひとり堅き寢床に悶えぬる夜半を安けき病友らが寢息  
モルにネの止痛注射が効き來たるこの快さに寢つかゝとすも  
敵國に現を身病みと思はざる手當受けつつ兵をこそ思へ

人が手にまかする瓶の草花の早き素枯れはいはで捨てさす

書き暮らしつつ

泊 良 彦

夜の明けに満月は黄色増し、朱さして煙る屋並の際に低まる（一月廿八日）  
出立の迫れる時に静かにも燈明をもす御佛の前に（若き人校束されむとす）  
あやふさは知りて避けざりき行く人の心に充てるものをぞ思ふ  
城山の中腹に立つ蒸氣凝りのぼり屋の上の雲と行き流れたり（三八雨後）  
行きがてぬ山べと思ひて見放けをり露鵲照り動くその斑雪山（シヤスタ南カの連山を望む）  
早起きの人の見えたる夜の三時われは筆おきて寢に就かむとす（ある夜）  
現世身のわれの身鳴りを天井にひびくが如く寂しみ仰ぐ（少年時代に鼓腹を）  
後る

X

X

X

村越光子様を悼みて

升谷 千代

苦しさも惱みも去りて安らけく君のみ靈や眠りぬまさむ

折々の歌

足田 桂子

踏々板の上に置く霜さらさうと軒の灯あびてあやにかがやく  
言ひたさを遂に耐へ得てすぎにけり何か心に湧く和ましと

（以上二氏類選着）



# 選歌餘筆

泊 良 彦

△相寄りて凍え死にせむ蛾と蠅のたまゆら燃やせし熱きをおもふ

この作者は年の若い割合に折々佳作を発表してをり前途有望に思ふものである。右の作でも上句の着眼にいゝところがあるのだが、四五句がよほど迎へてとらなれと解りにくい憾みがあり、言ひすぎてゐるともいへよう。寧ろその蛾と蠅の相寄りて凍死せる場所状景をつぶさに描き上げて下句の主観的言葉はひかえた方がいや味の少ないものになつたであらう。

△ロツキ一の連峰は雪に埋れど荒肌黒く斑らに著るし

この作は第三句を不用意に使用したか或け上句と下句との關係をはきりさせなかつたものといへる。若しも連峰が雪に埋れてゐたとすれば荒肌が黒く見える筈がない。これは頂きの方だけが雪に覆はれて山壁が所々加か黝く見えたもので言ひ足りないのであらう。中心は四五句にあるのだから左の様にでもしたら幾分よくなるであらう。

○斑雪なすロツキ一山脉のところどころ荒肌が黝く現はれにけり

また、その連峰が雪に覆はれた状景を是非に詠みこみたいとなれば、その白雪皚々たる連峰と肌の黒さ中腹の裂との關係を描き出す必要がある。



△おしめしめれば直ぐに泣くとか敏感の性を持つ孫とひそかに思ふ  
 作意はわかつてゐるが、現はし方がたゞしい。三句なども敏感な孫で通  
 ると思ふ。加へ、おむつがしめつて泣くといふのは稀有のことではなく、  
 若し最初よりいつかへよければ大方さうなのではないだらうか。更に  
 又、歌品といふものも考慮すべき問題だといふことを忘れてはなるまい。  
 松村先生がお書きになつたものに、たしか或作者の歌で、病後のつれづ  
 れに出で足の裏の皮をむくといふ素材に對し同じく歌品といふ事に言及  
 されて、現実が曝露しすぎてゐるといふ大意のことを注意されてあつた記  
 憶がある。現代歌は必ずしも美を求めず、時と場合で醜にも取材する  
 がその場合矢張その醜の底に何かの眞実なものがあらねばならぬと思ふ。  
 そしてその発想の仕かと表現の度合にもよることである。いづれにしても  
 文章にしよ歌にしよ、一つの品位といふものは頭において然るべきだらう。  
 右の歌など赤子の敏感といふところが中心なのだから、第一句のみを促へ  
 て品位を云々するのはどうかとも思ふが序に一言したのである。

△岩を搏ち碎きては流るる氷塊を吾見詰め居たり其の兎等憫びつつ

一二句のうかんだきは言ひ表はし方が至らぬ。氷塊が岩を搏ち碎くだ  
 の意が、或は岩をうち氷が碎けてではないか、あいまいに思はれる。更に  
 この作は四句まで日嚴冬の間山の景象を云々し下々五句に至つて急に、



兵の云々と取つてつけた様な句を以て結ぶとしたのは失敗である。四句までの景象を今少しく入念に描寫して結句まで及ぼし一首とすべきであつた。作者は事實兵の子を偲びつつその景象を見詰めてゐたものでけあらう、或は擲ち碎くといふやうなところに感を發したものかも知れないけれども、さうどころにあやかるのは古い手法といはねばならぬ。また、それをゆるすとしても今少し情と景との一致がなくては意味をなさないと思ふ。要するにこの作は感の統一がとれてゐないといふ外あるまい。

△何時かまた逢ふ日のありやしら波の風のまにまに吹かれてぞ行く

これには東西に別る、友正といふ前書が附いてゐる。これだけでは作者がどこかへ行く様にもとれるが、出て行くのはその友であることがその手紙で自分にはわかつてゐる。この歌は勅選時代などに陥つた掛け言葉を「ありやの疑問をいら波に掛け、波が風のまに」といつたふうにしてゐるが、この比喩めいたいひ方では決して切実な悲みの情は表はれないといふことを知つて貰ひたいのである。直接的な事實を本とした言辭を以て表現することを心がけて貰ひたい。この二三年所内で辛苦を共にした友ともつひに別れねばならぬのか、いつまた逢ふことが出来るのであらう」といふ様な情を、その友によつて受けた印象やその他で直接的に打出すべきものと思ふ。



高原新年号拾五首抄

永瀬 勇

いふべくば諸人閑居の中に住みて多く交はらず一年は過ぎぬ（泊氏）

雪解の霽けがらひたてる野の涯にシヤスタ山嶺は照りてありと思ふ（夫尾氏）

うちとけて語る人なきこの吾れにツ―ヒ―滞まつばこぼこと鳴る（加川氏）

クレオン絵幼な乍らのよろしさよ馬も喰みなぐめり牧草の太きに（綾織氏）

凝らしゐる意識に觸れて今なりとメスの動きを背すぢに感ず（仁熊氏）

頼るものの極みは寂しさの思ひに觸るる時にしあらむか（梅本氏）

眠らむと閑ぢし眼に顯ちたつはひと見暮らしし粉雪の影（尾川氏）

恃むもの心に熱く持ちあつひそかるる生海今日もたてたり（鹿島氏）

潮波みの人形も添へて入水やらむ嫁ぎゆく娘の荷をまとめをり（加藤氏）

ありし日に母と添ひ寝の樂しみを語る我が子の顔を見守る（野村氏）

天づたふ冬陽常のごと照らせども熱なきものの如く冷めたし（安高氏）

訪ひたまふ歌互の待たるる黄昏を降り出し雨の音いよいよ高き（村越氏）

群羊の一つ隈より崩はれて動き次第に渦となりゆく（原氏）

訪人も絵にかき持て水愛妻をつばにをさめし水は旅ゆく（田中氏）

三つ尺のほきの紅葉は夕つ日をまともに受けて映りがやける（高山氏）



新年号拾五首抄

安高きち

一り子はわがふところにしがみつき離れどとすも二の子来て引くに(永瀬氏)  
いつ果てむ非常時乍ら悔ゆるなし子供う集ひ物學ぶ見れば(萩尾氏)  
迫り合ふ建物の間わたる一ときの陽の光さす厨あまねく(尾川氏)  
まをとめの日を惜みつつ化粧すと鏡に向ふ娘に笑みかけぬ(加藤氏)  
三千尺のほきの紅葉は夕つ日をまともに受けて映り輝ける(高山氏)  
二つの尾根空を挟めて相對ひ谷の瀬音は峡にこもりふ(三保氏)  
病室の我が視野なる一つ窓看護婦は折々セード下しゆく(榊越氏)  
防人も絵にかき持て水憂妻をつげにをさめしわ水は旅ゆく(田中氏)  
壁に動く蜘蛛をうつろに視つめつつひとつの事に思ひ凝りゆく(越後氏)  
外の面より歸れる吾子の呼ぶ声す沁々母を頼るひびきす(田名氏)  
いつよりか淫祠が立ちて冬枯の野中に細き徑かよひたり(矢尾氏)  
氣あつかしき吾と知るゆゑ息氣をつかふ妻も夜更けて今は寝ねたり(加川氏)  
憤り堪へつつあればやうやくに自己おのれかへりみる餘裕いできぬ(相田氏)  
他人の血と吾が血と交る反應がもづがゆく顔にけりせ出て来ぬ(仁熊氏)  
西北野を乱あかりし雁の群城山の空に列やや校正ふ(泊氏)

峯土香歌會十二月度詠集

田中葦抄



君が家を出づればかどの鵲頭の長き花春風にゆれをり 春野陽子

懐しく常にあらなと希ひおて子らにはげしきもの言ひにけり 足田桂子

とり入水に人驚いそしみ許多の人参満たせし袋列み立つ 岩月静恵

溪河の水汲み吞めば身に沁みてハント高原すでに冬かも 柏木天浪

幼稚園の児らかざし行く雨傘は手にあまるらし秋雨の中を 川田頼子

前線の塹壕において今宵もか月の下びに予らた、かけむ 三原かつの

雨となる空とは見えぬ旗雲に夕日の映えて黄金色なす 三原泉流

歩み来てかりき疲れや川風のそこはかとなき匂ひ親しも 村上静子

露深き今朝をほころぶ菊の花乏しかれども心嬉しき 中川末子

み佛のみ命のうちに生死は一つぞと詠めて君逝きましぬ(寺川純) 中村郁子

再びを看護の業につくときめ心張りつつ廊下を急ぐ 大場まゆみ

山霧の移りすぎてし一ところ唐松の間に黄葉輝よふ 大場砂丘

山嶺も谿も動かぬ霧に埋れて岩ばしり行く水の音きこゆ 杉浦 悠

寂けさを愛でてを来水ば晝さへや小暗き森に虫鳴さつがり 田中草城

ポストン歌会霜月抄、水 瀬 勇

日米の攻めひしきあふ此時に故國の名氏の聲聴かむとす 一升谷千代

グリーンハウスの温度守りつつこの夜半を夫に代りてボイラ焚我は赤星さと

瀬をなして流れしこともありつらむ涸渙のべに憩ひつつ思ふ清時文子

秋来ぬと思ふ静けさよ朝空に千鳥の聲の澄み透りつつ 一川原(軍子)



姪小る妻を残して戦ひに海越えゆかす二、五兵を思ふも

一柳本錦子

深窓に白ふ乙女か初春の苑に玉裳裾ひき手鞠つき遊ぶ（観念）一見玉ふそ

うら嘆き母は得堪へぬを召集令うけし子けただに口笛吹きをり一矢形淡山

由々しかる大戦の今を憂ゆゑに君が命は斬り断たれた（斬殺事件）貴家しま

車窓の闇をたまゆら燈きて消えたるは標識燈ならむま月かりにやり大空 魁

堤川の土管の口より噴き出づる水は夕焼に紅く染みたり 大園晴子

雨雲の去りたる空にさむぎむと星の光は息吹くが見ゆ 永瀬正臣

い征く子を送り来たりて部屋ぬちに夫と吾とはもの言はずをり北林静江

とりどりの趣き活けむと弟子達のひたぶるの面を吾胸を打つ川口静洋

逝きし弟の寫眞に話しかけつつ母は果物を供へ給へり 池田愛子

雨そそぐ庭の白菊ぬれそぼち花かたむきて雲こぼしぬ 鈴水緑松

もの学ぶさほひ心も失せ果てつ身の衰へを著く意識す 望月まり

何地とも知れぬ戦地の兄君に妹の送りし菊の世化けも 赤松傳代

今年も後一月と存りにけり假の住居に落着かめまき 安井静女

みすずかる信濃の秋日夕づきて鴉ぬぐらへ連水かへるところ 永瀬勇

グラナダ短歌會睡月抄 木林 木田 鶴子

家蔭に古りたる雲は高原の日紅に今日を解け終らうし 原 哀叫

寄合ひて餅搗きはしやぐ収容所閑鎖さば散らむこれら同胞 桐原李村

氷柱よりしたたる水に浴ぶ雀窓越にみつ背助の寒し 鏡所都霧



若きらが餅搦く杵の上げ下りし面白くして眺めあかずも  
 木村けな  
 たたなりぬ雲行みせて吹く風付やや衰へぬ雪となるらし  
 久須美とみ  
 何時になき静けさ保ち讀む歌書の一音一首に興味湧き來も  
 西尾木星  
 まぶしさに面伏せ歸る雪の道小鳥死せるに歩みふと止む  
 山内政江  
 窓に映ゆる燈火の光ものさびし宿なし犬の軒下に迷ふ  
 平井静子  
 何時までの命なるらむ収容所の豚肉鎖までには喰へど命あり大寺望  
 川脇無一  
 ま對ひてゆるく吹さぬし粉雪の風向変り面なであぐる  
 吾がつけし大さ足跡をふり見つつ未だあとなき雪の路次ゆく畑麦浪  
 歸るべき家は有ちつつ戦時いま猶しためらふ加州歸還は  
 森本田鶴子

ハート山支部第八回歌會抄

加藤はるゑ

落葉樹の疎林過ぐるとバス中に見惜み呆くる黄葉の輝やき  
 梅本静惠  
 にとたどしき吾が英文乍ら遠き子のひた待つ思へば書きつづきし仁科信子  
 かき上げし額わが母に似て來つと氣づきて向ふ鏡くもりさぬ  
 西村津矢子  
 時じくにくうらうら照れる師走の晝新しき歌友を迎へて集ふも  
 吉田晴江  
 山の上の清けき聖堂に詣で來れば夫のみ魂に觸るる思ひす  
 上田せい子  
 祝言をこもごも受けつつ唇に笑み瞼は濡れつ母心あはれ  
 娘を  
 加藤はるゑ

△峯工舎及ポストン歌會詠草にはなほ絶に幾氏かのものがありました

たが紙面と鉄筆時間の都合で高原に無関係のものは遺憾外しとし  
 たことをその提出者並に会の方へおこししておきます(右生)



# 編輯後記 附消息

泊 良 彦

▲年明けて二月<sup>ふたつき</sup>を経むとしてをり、殆んど書き續けてゐると一層月日のたつのが速かに感じられます。戦時の收容所生活と云へ、お互に何かを爲しつつある心強さを持ち更に明日を有意義に過さむ心構へこそ大切なものだと思ひておます。

▲新年早々とバズの村越光子氏長逝の報を受けました。一同と共に哀悼に堪へない次第です。依て本號を以て故人の追悼號とし靈前に供ふるものです。鉄筆しつつ思つたことですが辞世の詠まで遺されたことですしそのお墓碑の片面に夫の絶詠を刻まれたら永遠の好紀念となるのではないでせうか、若しまだ墓碑の建設が成らぬ中でしたら、トハズの歌友諸君より遺族の方へ提言あらむことを希望します。

▲高原を隔月にしてから次々と為すべきことなしたい事が生じて却て多忙になつてをり、なかく手紙は書けずにおますから諒恕を希みます。吾歌選集は出来るだけ良筆家に依頼して作りたいと念つてゐます、必要の方は既報の通り三月十五日迄に豫約あり度し。唯嘆して無理にお勧めするものではありません。尚ほ同集は中味の体裁を考慮して一首を二行に而して古語難解語に簡單なる註釈を附する考へで、爲めに予定より百首位は歌数が減ずるかも知れません。

▲次に本号所掲の高原選抄には希望者は地方歌會詠草として各巻末に



採録せらるるものをも送られて差支へ  
ありませぬ。但し一人世首限、更に  
当方で再選するものであることは  
御承知下さい。何程の参加者になり  
何十頁になるか、今日予想し難く、従  
てその領布がいくらになるかも不  
明ですが一部五拾仙見当であります。  
歌を載せない方でも五月拾日迄申  
込あれば領布することになります。

これは選歌や鉄筆に相当の時日を  
要することゆゑ今日、何日迄に領  
布出来るか確約はしかねます。が、  
七月中には出来上るものと思つて  
おります。間あひだで高原の仕事  
せねばならぬからです。なほこれ  
らの企画も身邊に異変が生ずれば  
出来ないことになりませんが、環境  
や健康に幸ひに恵まれ、心身を祈  
念してありますし、諸君のお心添へ  
を待つものです。

△中村郁子氏は一月三度入院されて  
更に手術を受けられ、たさうですが  
尚苦痛が続いてゐるとのこととで、  
共にその速かるる全癒を祈るもの  
であります！

△当地に熊氏は一月中旬退院、自宅静  
養中にて日々全癒に近づいてゐます。  
本号も天尾君、加川氏夫妻、外諸君の  
援助に負ふ所が、からず記して厚く  
お禮申述べます。(九号詠草、四月廿日)  
終りに四方諸氏の自重自愛を切  
に祈り筆を擱きます。(二・二一夜半)

昭和二十年三月一日 発行

短歌

高原

隔月刊

雑誌

非賣品

維持會員三回 壹帛

編輯責任 泊 良彦

ツールレーキ・二〇〇四八二



あはれ  
の